

## 朝鮮革命と朝鮮民主主義人民共和国の創建における 金日成主席の業績について

ロシア、ロストフ金日成・金正日主義研究協会会長  
ドミトリー・レミゾフ

1948年9月9日、朝鮮民主主義人民共和国が創建されました。平和的な国家建設が2年近く続きました。1950年夏、朝鮮民主主義人民共和国は長きにわたる力の試練を乗り越えなければなりませんでした。

アメリカ帝国主義者に反対する祖国解放戦争が始まりました。創建されて間もない社会主義国家と人民はこの試練を誉れ高く乗り越えて帝国主義侵略を撃退し、共和国を守りました。新しい国を建設する真の建設期が始まりました。

「日本帝国の植民地」でどのように社会主義発展の道を選択し、それを頼もしく守っていく誇らしい人民をもった一つの強国が生まれることができたのか？理論的に見ると一部の弱小国はすべてのことを「大国」に順応して傀儡政府を樹立することによってのみ存在することができるのです。しかし、そうではなかったのです。それは朝鮮の北半部で数十年間の民族解放闘争を通じて準備された社会主義革命が行われたからです。党が執権し、人民に支持され、この闘争の中で強化されました。自主の思想であるチュチェ思想を創始し、具現した卓越した革命家であり政治家である金日成主席がこの党を指導しました。

日本植民地主義者に反対する金日成主席の武装闘争は、幼年時代に父から譲り渡された2挺の拳銃に始原を置いています。まさにそれ以来1948年朝鮮民主主義人民共和国が創建されるまで数十年間の遊撃活動がくり広げられ、この過程に勝利を収めようとする意志が強くなり、朝鮮人民の社会主義精神の中核となる思想であるチュチェの革命思想の生命力が実証されました。

領土と人口が相対的に小さいこの国が一方は侵略的な日本とそして他方は広大な領土をもった中国とロシアに挟まれていることにより、朝鮮の自主権守護は歴史的に複雑でした。さらにアメリカとイギリスそしてドイツのような大洋越しの帝国主義者たちも北東アジア地域に恒常的に魔手を伸ばしました。

1920年代に朝鮮の民族解放運動の指導者の中には独立闘争の方向を探すために東邦の日本と競い合う他の「列強」の支援を受けようとした人々もいました。そうした多くの人々は朝鮮の独立は「列強」の衝突の結果として達成されるだろうと見なしました。その中のある人々は中国やソ連、はてはアメリカの外交官を訪ねまわり、またある人々はイギリスの外交官を訪ねまわった。

初期共産主義者も「列強」の援助にたいする希望を抱いていました。しかし、ブルジョア民族主義者とは異なって彼らは資本主義諸国ではなく、ソ連の援助を期待していました。ソ連は朝鮮人民に支援を与えることができましたが、これは朝鮮の勤労者自身が自らの自由のために戦う準備ができているときにのみ可能なことでした。

金日成主席は占領者に反対する闘争は人民の支持を受けるべきであり、また侵略者に反対する闘争は自国人民の力に依拠しなければならないと見なしました。主席は朝鮮人民は自らの力で解放を成し遂げることができると信じました。「列強」の戦いの結果、日本が弱まり、また敗れることもありうると見られますが、この「列強」は朝鮮に真の独立を与えないだろうし、日本の占領は他の形態の依存に変わるでしょう。

金日成主席はこれについて次のように述べています。

「歴史には強大国が小国に同情し、弱小国の人民に自由と独立をプレゼントした前例などない。民族の自主権はもっぱらその民族自身の主体的な努力と不屈の闘争によってのみ保全し、獲得することができるのである。これは世紀と世代をへて、歴史によって検証された真理である」

朝鮮共産党の他の指導幹部は近隣である中国で始まった革命の波が朝鮮にも自動的に押し寄せるだろうと見ていました。こうした誤った前提をもっていたことにより、彼らは決して朝鮮の人民大衆の中に入って活動しませんでした。

金日成主席はそうした悪行と政治的怠惰について次のように述べています。

「中国革命が勝利すれば、おのずと朝鮮革命も勝利すると言う人がいるが、それは途方もないことだ。それぞれの国の革命には各自のコースがあり時間表がある。自分の力が準備されなければ、隣国の革命が勝利しても、その国の革命の勝利は絶対におのずともたらされるものではない。したがって、すべての国の共産主義者は、他人が自国の革命を助けてくれるのを待つのではなく、自分の力でそれを遂行するためにたたかわなければならない」

他国の人々が社会主義革命を行う間、社会改造のみを基本的に遂行すればよかったならば、社会主義をめざす朝鮮人民の闘争は国家の地位を取り戻すための民族解放闘争と密接に結びついていました。

同時に日本の支配からの解放は他国にたいするいかなる他の形態の依存にもなってはなりません。こうした条件で主席は国と民族の自主性に関する思想を次のように定立しました。

「わたしは反民生団闘争とその総括としての大荒巖会議の過程を通じて、自主性は民族の第一の生命であり、この自主性を堅持するためには、民族をなすすべての構成員、とくにその先覚者たちの犠牲的な闘争が必要であることを痛感させられた。

...

したがって、朝鮮共産主義者のすべての活動は、この目標の実現に服さなければならなかった。われわれは思考と実践において自主性の擁護を生命とし、そのためならいかなる環境のもとでも猛虎となり雷雨とならなければならなかったのである」

これは革命闘争の中で誕生した社会主義朝鮮の国家建設の政綱となった自主の思想がどのように生まれたかを見せています。

主席のこのような思想で武装した朝鮮人民は革命をくり広げて共和国を創建し、帝国主義侵略者との直接の対決の中で共和国を守護し、社会主義を建設し始めました。

1990年代初、世界的な逆行が始まっていた時期、朝鮮民主主義人民共和国の自主性は反動派の兵器を打ち壊した盾となりました。

革命活動の初期にも、自主路線の勝利のための闘争でも主席は党内で教条主義路線を引き続き追求する分派分子を粉砕しなければなりません。現実的に分派分子はまったく活動をせず、ただ活動するふりをするだけで活動力がありませんでした。

これについて金日成主席はこのように述べています。

「初期の共産主義者は事大主義にとらわれて、自力で党を建設し革命を進めようとはせず、各自『正統派』をもって任じ、ジャガイモの印鑑までつくってコミンテルンの承認を得ようと駆けずりまわった。

わたしはわが国の民族主義運動と初期共産主義運動のこうした実態を分析し、革命をそういうやり方で進めてはならないと痛感した。

こうしてわたしは、自国の革命は自らが責任をもち、自国人民の力に依拠して遂行してこそ勝利するのであり、革命で提起されるすべての問題を自主的に、創造的に解決していかなければならないという信念をいだくようになった。これがいまいつているチュチェ思想の出発点となったのである」

金日成主席は共産主義運動で青年力量を団結させて古い教条主義分派分子を撃破しました。

これについて金日成主席「わたしはつねに、青年を革命の前衛とみなした。青年は革命闘争と社会的運動においてもっとも困難な部門をになって立つ先鋒隊であり、主力部隊であり、未来の運命までになら根幹部隊である。…

われわれが革命運動を独自に切り開かず、前世代にのみ頼って彼らに指示されるとおり動き、彼らのあとにしたがうだけであったなら、日本帝国主義植民地支配のもっとも暗たんたる時期に、古い思潮と断固決別し、チュチェ思想の旗のもとに団結して朝鮮革命の新しい進路を切り開くことも、抗日遊撃隊を創建することもできなかったであろうし、民族の先鋒となって武装闘争を中心とする抗日革命全般を新しい時代の要求にそって発展させることも不可能であったにちがいない」と回顧しています。

金日成主席のこのような立場に照らして見るとき、20世紀の初頭、ロシアにおける

ブイ・イ・レーニンの活動で一つの類推を引き出すことができます。当時、レーニンは古いメンシェビキであるプレハノフの日和見主義路線を批判し、青年社会民主主義者でボルシェビキ党を創建しました。

主席は新たな条件で朝鮮における共産主義運動に活力を吹き込みました。

朝鮮民主主義人民共和国を「青年強国」と呼ぶのは決して偶然ではありません。主席は新しい世代と前世代が一つのリズムで生き、また前世代の同志たちが革命精神の若さを忘れないでおり、露骨的な「世代間の喧嘩」がない継承性が保証された国家を打ち立てました。

金日成主席は 1990 年代の初めにこのように書いています。

「八十の高齢に達したいまでも、わたしは革命の前衛としての青年の地位と役割についての見解を変えていない」

このような雰囲気は一時、「老人政治」が台頭し、古い修正主義者たちが新しい世代の生活と感情からかけ離れた結果、新たな裏切り者として成り下がった東欧の旧社会主義諸国とはっきり対照されます。

金日成主席が創建した国家はわれわれに他の姿を示しました。

それについて金日成主席はこのように述べています。

「一部の国々にて青年学生が社会的に頭痛のたねとなり、反革命の手先となって祖父の代に築いた塔を崩しているとき、わが国の青年はとりでとなり盾となって、抗日革命烈士が切り開いた革命偉業をりっぱに継承しているのである」

金日成主席の思想、朝鮮民主主義人民共和国の創建の基礎となった自主の思想は今日、帝国主義者のグローバリズムからの解放をめざしてたたかう人民に導きの星となっています。